

## 「ロダンに捧ぐ」をめぐる小論

賀川恭子

19世紀フランスを代表する彫刻家オーギュスト・ロダンは、1917年11月17日、パリ南西にあるムードンの地で亡くなった。2017年はロダン没後100年にあたり、フランス国立造幣局は4種類の記念硬貨を発行した。10ユーロ銀貨、100ユーロ銀貨、2ユーロ記念硬貨2種類。いずれも裏面にはロダンの横顔と《考える人》が刻印されている<sup>1)</sup>。このようにロダンはフランスを代表する芸術家のひとりとして位置づけられている。

遡ること50年。ロダン没後50年にあたる1967年には「ロダンに捧ぐ」と題された5点の版画が発表された。2006年に姫路市立美術館と福井市美術館で開催された「ロダンの系譜」展では、序章「ロダンへの讃歌」のなかでこの5点が取り上げられ、これらの版画が1967年にパリのルシー・ワイユ画廊で開催された「ヘンリー・ムア、ザツキン、アダム、クーチュリエ、ラルデラらによるロダンへの讃歌」展で展示されたとの説明が記された<sup>2)</sup>。この版画の国内での所蔵は複数あるものの、これまで当館で展示する機会は多くなかった<sup>3)</sup>。そのため、この節目の年にあたり、作品の成立背景の検証、考察をおこないたい。

### 1. 「ロダンに捧ぐ」

「ロダンに捧ぐ」を手がけたのは5人の彫刻家である：イギリスの彫刻家ヘンリー・ムア（1898-1986）、ロシア出身でパリを拠点に活躍した彫刻家オシップ・ザツキン（1890-1967）、イタリアの彫刻家ベルト・ラルデラ（1911-1989）、フランスの彫刻家ロベール・クーチュリエ（1905-2008）、同じくフランスの彫刻家アンリ=ジョルジュ・アダム（1904-1967）。5人とも当時評価の確立していた彫刻家だった。1967年8月27日に没したアダム、同年11月25日に没したザツキンにとって、この版画は最晩年の作品のひとつとなる。

以下、作品の詳細を確認する。

ヘンリー・ムア《ロダンに捧ぐ》(fig.1)の画面下部中央には「Homage to Rodin」と英語での記載があり、右下には「Moore」の署名、左下には「19/120」の番号がある。版画にあらわされているのは8つの〈横たわる人体〉。〈横たわる人体〉はムア作品に頻繁に登場するモチーフである<sup>4)</sup>。この版画では軽やかな輪郭線で描かれた8つの人体が、青色と黄色の線で塗られている。いずれも上体を起

こして、頭を持ち上げ、膝を立てている。高橋幸次氏が指摘するように、ムアはロダンから多くの影響を受けて、自らの彫刻を築く上に利用していた<sup>5)</sup>。若い頃にロダン風の商品（老人の人物像と赤ん坊の頭部）を制作したこともあったムアだが、ロダンから適度な距離をとって制作活動を行っていた。1970年にムアは次のような発言をしている。「ロダンはミケランジェロに実に多くを負っている。だが、ご承知のように、何かをはなはだしく好きになっていると、それに反抗して反対の立場を取るようになるかもしれない。しかし内面ではそれから逃げられない。これが、ロダンに関して私に起こったことなのです。徐々に私は分かり始めました。例えば、黒人彫刻のようなもの、それは簡略化した制作プログラムを与えてくれますが、そういった、人が利用したりそれに影響されたりするかもしれない多くのものは、ロダンと比べられるものです。でも、概して安易過ぎる、と。それで時間が経つと、私のロダン賛美はますます大きくなったのです」<sup>6)</sup>。

ロダン同様、若い頃ロダンに傾倒していたオシップ・ザツキンは、その後、ピカソらとの交流を

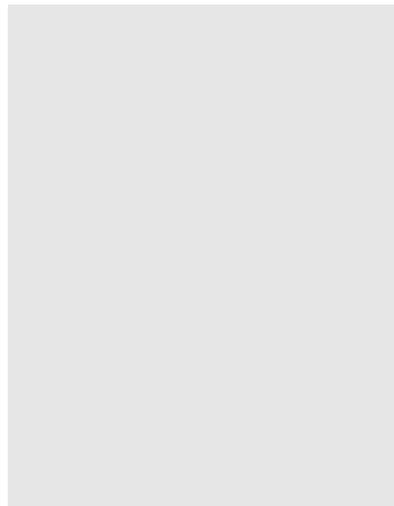


fig.1  
ヘンリー・ムア《ロダンに捧ぐ》1966年、リトグラフ、29.5×24.0cm、石橋財団ブリヂストン美術館  
Reproduced by permission of The Henry Moore Foundation

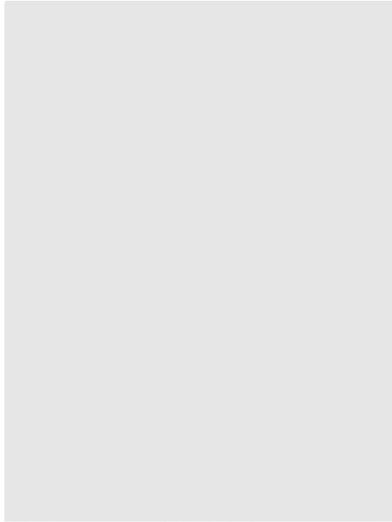


fig.2  
オシップ・ザツキン《ロダンに捧ぐ》1967年、  
リトグラフ、60.2×36.0cm、石橋財団ブリヂ  
ストン美術館

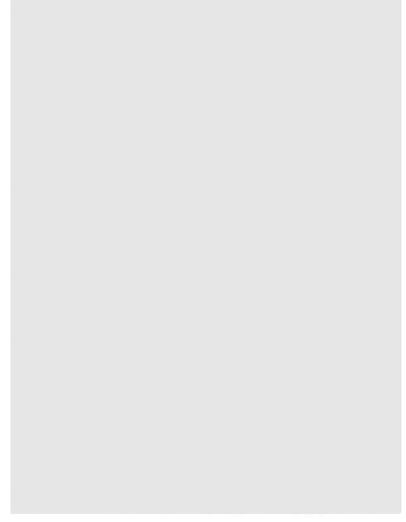


fig.3  
ベルト・ラルデラ《ロダンに捧ぐ》1967年、  
アイアン・エングレーヴィング、62.3×  
49.0cm、石橋財団ブリヂストン美術館  
©ADAGR, Paris & JASPAR, Tokyo, 2018  
C1989

通じてキュビスムの彫刻を制作することになった。ザツキン《ロダンに捧ぐ》(fig.2)の画面下部中央には「Hommage à Rodin」とフランス語での記載があり、右下には「O. Zadkine」の署名、左下には「19/120」の番号がある。版画には二人の人物が描かれている。右側の人物は赤色の輪郭線で縁取られて、黄色と青色で彩られている。両手を合わせて両足を揃えたこの人物は、いささか従順な雰囲気を示している。この人物に腕をまわすもう一人の人物は、黒色と青色であらわされ、赤い目を見開き、赤い舌を出しており、支配的な位置に立つように見える。

ベルト・ラルデラ《ロダンに捧ぐ》(fig.3)には円、台形、扇形といった幾何学的な形態があらわされている。画面右下には「Lardera」の署名、左下には「19/120」の番号が記されている。イタリア生まれのラルデラは、1947年にパリに移住し、1989年に亡くなるまで同地に住みつづけた<sup>7)</sup>。屋外彫刻も手がけており、1967年のモントリオール万国博覧会ではフランス館正面に彫刻作品《イル=ド=フランス》が設置された。垂直と水平方向の鉄板を組み合わせた「2次元の彫刻」と同じ構成要素が、この版画にも認められる。青色と黒色の無機質な色合い、形態の輪郭線のギザギザした様子は、彼が用いる金属板を想起させる。

ロベール・クーチュリエは人体を題材とした彫刻作品を制作したことで知られる。建築家ジョセ

フ・ベルモンの設計した在日フランス大使館旧庁舎(1957年建築)入口にも、クーチュリエのレリーフ《芸術》《田園生活》が設置されていた。クーチュリエ《ロダンに捧ぐ》(fig.4)の画面下部中央には「Hommage à Rodin」とフランス語での記載があり、右下には「Couturier」の署名、左下には「19/120」の番号がある。この版画では左方向を向く人物(おそらくは男性)の横顔と左耳が大きく描かれている。向き合う対象も人物なのだろうか。唇のようなかたちがあらわされているが、そのかたちが意味するところは曖昧である。

アンリ=ジョルジュ・アダム《ロダンに捧ぐ》(fig.5)の画面下部中央には「Hommage à Rodin」とフランス語での記載があり、右下には「Adam」の署名、左下には「19/120」の番号がある。人物彫刻から出発してより抽象的で有機的な形態に向かったアダムによる作品は、5点の版画の中でも、ロダン礼讃という意味合いをもっとも直接的に示している。ふたつの右手が合わさったロダン晩年の彫刻《カテドラル》(fig.6)が画面中央に描きこまれ、周囲の色帯にも手のモチーフが繰り返され、帯の左下部分には「HOMMAGE A RODIN LA CATHEDRALE」の文字が認められる。帯の左中央には「BALZAC」の文字があり、その下にはバルザックらしき人物が、横顔の男性と向き合っている(fig.7)。この横顔の男性は《青銅時代》(fig.8)や《考える人》(fig.9)を彷彿とさせる。

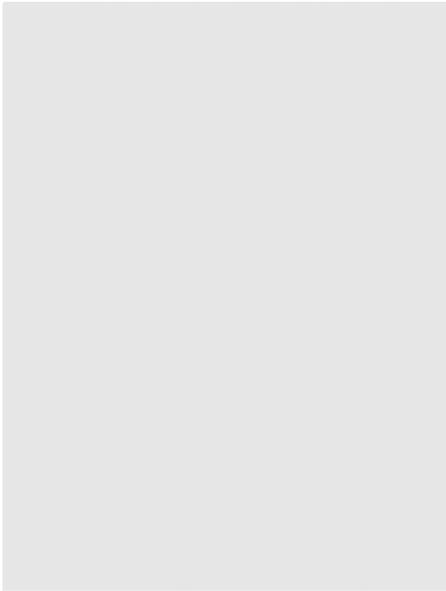


fig.4  
ロベール・クーチュリエ 《ロダンに捧ぐ》1967年、  
エッチング、59.0×47.8cm、石橋財団ブリヂストン  
美術館  
©ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2018  
C1989

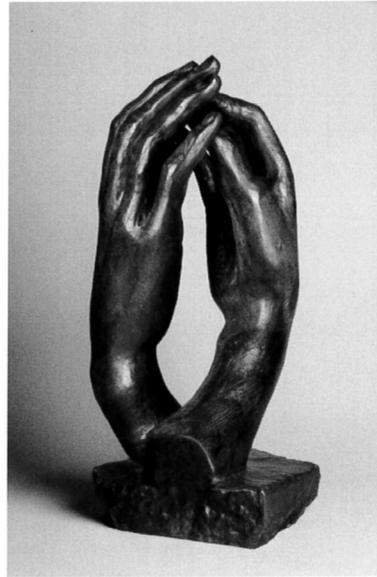


fig.6  
オーギュスト・ロダン 《カテドラル》1908年  
(1925年铸造) ブロンズ、62.2×27.3×29.8cm、  
フィラデルフィア美術館  
Auguste Rodin, The Cathedral, modeled  
1908; cast 1925, bronze, 62.2 x 27.3 x 29.8  
cm, Philadelphia Museum of Art, Bequest of  
Jules E. Mastbaum, 1929, F1929-7-40, www.  
philamuseum.org

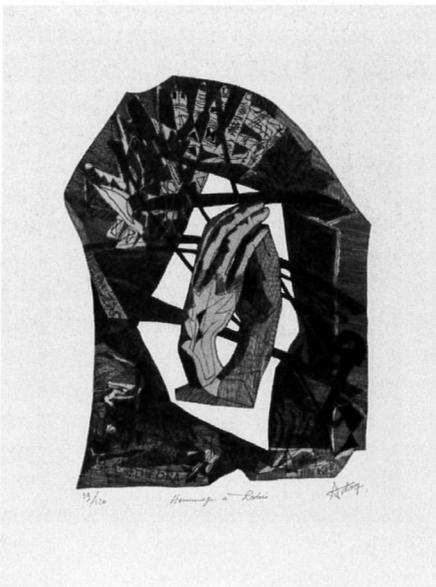


fig.5  
アンリ=ジョルジュ・アダム 《ロダンに捧ぐ》1967年、  
ライン・エングレーヴィング、53.0×39.3cm、石橋  
財団ブリヂストン美術館



fig.7  
オーギュスト・ロダン 《バルザックの頭部》  
1898年(1925年铸造) ブロンズ、50.8×41.9  
×38.7cm、フィラデルフィア美術館  
Auguste Rodin, Colossal Head of Balzac,  
modeled 1898; cast 1925, bronze, 50.8 x 41.9 x  
38.7 cm, Philadelphia Museum of Art, Bequest  
of Jules E. Mastbaum, 1929, F1929-7-1, www.  
philamuseum.org



fig.8  
オーギュスト・ロダン《青銅時代》  
1904年、ブロンズ、高さ63.5cm、石  
橋財団ブリヂストン美術館

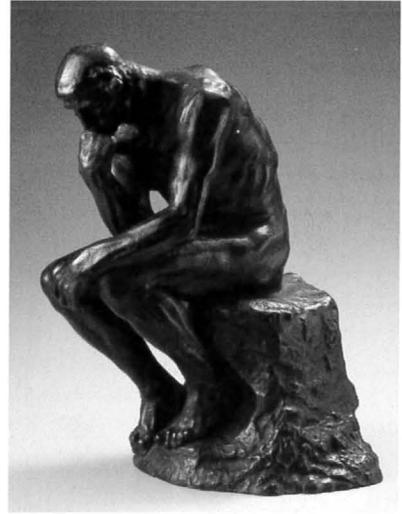


fig.9  
オーギュスト・ロダン《考える人》1902年頃、  
ブロンズ、高さ37.7cm、石橋財団ブリヂスト  
ン美術館

当館所蔵作品のエディション番号がすべて「19/120」となっていることから、5点が同じセットに含まれることがわかる。これらの版画は書籍に付随していた。美術批評家イオネル・ジアヌ（1905-1993）とロダン美術館館長セシル・ゴールドシデル（1902-1988）が1967年に刊行した著書『ロダン』（fig.10）である<sup>8）</sup>。ブリヂストン美術館が所蔵する書籍にも「19」という番号が付されている。書籍を確認すると、巻頭の記載に詳細が記されている。その記載によると、初版120部に5点のオリジナル版画集「ロダンに捧ぐ」が付随し、1から120までの番号が付された。それぞれの版画の摺師名も記載されている：

ヘンリー・ムアの5色のリトグラフは、J・E・ヴォルフフェンスベルガー（チューリッヒ）により刷られた。

O・ザツキンの9色のリトグラフは、ムルロー工房（パリ）により刷られた。

ベルト・ラルデラの彩色アイアン・エングレーヴィングは、ラクリエール=フレロー工房（パリ）により手刷りされた。

アンリ=ジョルジュ・アダムのライン・エングレーヴィングは、G・ルブラン芸術工房（パリ）により刷られた。

ロベール・クーチュリエのエッチングは、ジャック・ダヴィッド（パリ）により刷られた。

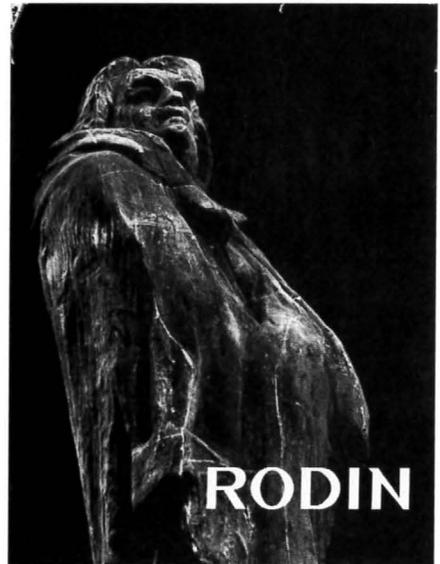


fig.10  
イオネル・ジアヌ、セシル・ゴールドシデル『ロダン』  
1967年（表紙）

以上が5点の版画の詳細情報となる。「ロダン礼讃」の方法は作家によって異なり、それぞれの個性があらわれている。

次にこの書籍が刊行された時代背景を検証したい。

## 2. 1967年のロダン

1890年代には国際的に評価が高まっていたロダンだが、1905年頃から若い芸術家たちがロダンへの断絶を主張するようになったことは、「ロダンを忘れる？」展（2009年、オルセー美術館）で指摘された通りである<sup>9)</sup>。没後の評価にも浮き沈みがあった。カトリーヌ・シュヴィヨによれば、「1930年代から1950年代にかけては、ロダンの彫刻作品ブームに陰りがさす。アングロ=サクソン系による大きな再発見の動きが起きるのは、1950年代のこと」だった<sup>10)</sup>。ブロンクス生まれの実業家バーナード・ジェラルド・カンター（1916-1996）は、1946年にはじめてロダン作品を購入したのち、1950年代にパリ・ロダン美術館を頻繁に訪れるようになり、美術館でつくられた鑄造作品を入手するようになった<sup>11)</sup>。1960年には美術史家アルバート・エルセン（1927-1995）の著書『地獄の門』が刊行され、1962年には「知られざるロダン」展がルーヴル美術館で開催され、1963年にはエルセン監修の大回顧展がニューヨーク近代美術館で開催された。1966年にはムードンのアトリエ兼自宅の公開もはじまった。なお、日本でのロダン愛好を示すかのように、1966年に「没後50年記念 ロダン展」が東京、京都、福岡の4会場で開催された<sup>12)</sup>。

先に述べたとおり、美術批評家イオネル・ジアヌとロダン美術館館長セシル・ゴールドシデルによる著書『ロダン』が1967年に刊行された。ゴールドシデルは序文で「1917年11月17日のロダン没後50周年を記念して、今年はロダンに関する書籍が複数刊行される予定である」と述べている。ロダン没後50年に合わせて刊行されたこの書籍には、23名の美術批評家による「ロダン礼讃」のメッセージに続き、ジアヌによる「ロダンの奮闘」「ロダンの生涯と作品」、「年表」「展覧会歴」、ゴールドシデルによる「ロダンの彫刻総目録」と作品図版が掲載された。

ロダン研究者のアルバート・エルセンは、この書籍の書評を美術雑誌『パーリントン・マガジン』1967年10月号に寄せた<sup>13)</sup>。エルセンの書評は手厳しい。パリ・ロダン美術館に保管されていると考えられる膨大なアーカイブ資料（ロダンの未公開の素描やスケッチブック、手紙、メモ、図書、写真資料、作品制作に関する資料、新聞スクラップ）を本書では活用していないことを非難し、ジアヌのテキストの無味乾燥さと不正確さを指摘する。その上で、ロダン美術館の秘書とアーカイブ担当を長年勤めてきたゴールドシデルが、ロダンのすべての作品の完全な情報を提供しないことを批判

する。

エルセンの書評は、ゴールドシデルへの不信任が目に見えるかたちであらわれた結果といえる<sup>14)</sup>。というのも、エルセンは、すでに1960年の著作『ロダンの《地獄の門》』の序文で、「ロダン美術館の屋根裏のアーカイブには、いまだ未刊行のロダンの私的な手紙がいくつもの箱に入れて保管されている。フランスの法律下では、芸術家の死後50年間はこれらの手紙を公開されることはない。書簡で言及された人びとを守るために設けられた公開禁止期間が満了するのは、1967年である」と述べ、この年に未刊行資料が公開されることへの期待を伝えていた<sup>15)</sup>。それだけに残念な気持ちも大きかったのだろう。

この書評に対する著者ジアヌの「反論の手紙」が、『パーリントン・マガジン』1968年7月号に掲載された<sup>16)</sup>。ジアヌは、エルセンの文章を「書評ではなくて復讐」と指摘し、自らの受けた批判への反論を試みる。さらに、さまざまな大家の名前を出して、自らの書籍の意味づけをおこなう。ハーバード・リードは「ロダンに関する美しい本である。この本を見るのは喜びであるし、読んでも興味深い」と述べ、レイモン・コニアは「資料と思想に富んだ仕事で、今後必須の書籍」と評したという。だからこそ「エルセン教授が次にロダンに関する書籍を出すときには、我々の研究書やとりわけその資料を参照するに違いない」とジアヌは言う。このような皮肉交じりの文章の詳細を検討することは避けるが、ここでは以下の発言に注目したい。

エルセン教授は、ロダン礼讃の章に現代彫刻家を招待しなかったという点で、我々を非難しています。このように指摘されるということはご存じなかったのでしょうか。ヘンリー・ムア、O・ザツキン、ベルト・ラルデラ、アンリ=ジョルジュ・アダム、そしてロバート・クーチュリエが、我々の招待に応じて版画を制作することで、偉大な先人への称賛の意を、自らの芸術言語で表現したということ。これら5点のオリジナル版画は、我々の研究書の豪華版に収録され、新しく独創的な方法でロダン礼讃を形成しています。けれども、ロダンについて何でもご存じの貴殿は、そのことを見出す労を取らなかったのです。

ジアヌは同じ出版社から刊行されていた画集「偉大な彫刻家シリーズ」の執筆を行っていた。単著として『ブランクーシ』（1963年）、『ザツキン』

(1964年)、『ヘンリー・ムア』(1968年)、『アダム』(1968年)、『ラルデラ』(1968年)、『クーチュリエ』(1969年)、『エティエンヌ・アジュ』(1972年)、『ジャン・アルプ』(1973年)、『アントワヌ・ボンセ』(1975年)、共著として『ブールデル』(1965年)、『ロダン』(1967年)、『ジリオリ』(1971年)、『マルタ・パン』(1974年)、『ヴィットリオ・タヴェルナリ』(1974年)などがあげられる。版を重ねているものも多く、人気のあるシリーズだったことが推察できる。このなかには、ジヌスからの版画制作に応じた彫刻家5名の名前も認められ、この書籍が刊行された時期に彼らが「偉大な彫刻家」として認識されていたことがわかる。

ジヌスが『ロダン』で用いた構成は必ずしも独自のものではなく、シリーズ内でくり返し使われていた。そのため、エルセンから痛烈な批判を受けることは想定外だったのかもしれない。いずれにせよ、ジヌスが5点のオリジナル版画を豪華版の特長と認識していたことは確かである。

### 3. 2017年のロダン

1967年の『パーリントン・マガジン』誌上の議論は、フランスとアメリカの研究者の対立、ベテランと若手研究者の対立(両者は20歳ほどの歳が離れている)を示している。エルセンと同様のことをルース・バトラーも指摘している<sup>17)</sup>。1950年代にロダン研究をはじめたバトラーは、フルブライトの奨学金を得てパリに赴いたものの、ロダン美術館の所蔵するアーカイヴをみることはできなかったのである。このような状況が変化したのは1970年代のこと。1973年にモニック・ロランがロダン美術館の主任学芸員に就任すると、美術館に資料室を組織し、研究者に資料の公開をはじめた。記録魔として知られるロダンの残した資料は膨大なものだったが、そのおかげで、バトラーは決定版ともいえるロダンの評伝を執筆することができた。その後、ロダン美術館は、ロダンの書簡や素描や彫刻の目録を積極的に刊行するようになる<sup>18)</sup>。ゴールドシデルによるロダン彫刻のカタログ・レゾネの第一巻は1989年に刊行されたものの、彼女自身が1988年に没したこともあり、二巻目以降の刊行は不明である<sup>19)</sup>。

エルセンはスタンフォード大学で教鞭を執るかたわら、大学附属のカンターアートセンターのロダン彫刻庭園の設置にも携わった。さまざまな展覧会の監修もおこなった。たとえば1972年にワシントン、ナショナル・ギャラリーとグッゲンハイム美術館で開催された「ロダンの素描、本物と偽物」

展<sup>20)</sup>、1981年にはワシントン、ナショナル・ギャラリーで「ロダン再発見」展<sup>21)</sup>があげられる。

そして2017年、ロダン美術館は「キーファー／ロダン」展(バーンズ財団に巡回)を開催すると同時に、没後100年の特設サイトを開設してさまざまな情報を提供し<sup>22)</sup>、ジャック・ドワイヨン監督の映画「ロダン カミューと永遠のアトリエ」の制作協力も行った。グラン・パレでは、ブリュノ・アヴェイヤンによる映像作品「ディヴィノ・インフェルノ」そしてロダンは《地獄の門》を創った)も上映され、「没後100周年 ロダン」展が開催された。ロダンの作品約200点に加えて、ロダンから影響を受けた作家たちの作品を展示する、この大規模な回顧展で、ロダンの革新性を再考し、20世紀美術に与えた影響を提示した<sup>23)</sup>。

本稿では、1967年に発表された「ロダンに捧ぐ」と題された5点の版画作品を手がかりにすることで、この50年間でロダンをめぐる状況が大きく変わったことを確認することができた。

### 註

- 1) <https://www.monnaieideparis.fr/en/shop/coins/year-date-2017>
- 2) 「ロダンの系譜」 姫路市立美術館、2006年9月16日-11月3日；福井市美術館、2006年11月11日-12月10日。この展覧会には兵庫県立美術館の所蔵する版画(「ロダンへの讃歌」)が出品された。
- 3) 大原美術館(「ロダン讃歌」)、東京国立近代美術館(「ロダン讃」)、愛知県立芸術大学(「ロダンへの讃歌」)、神奈川県立近代美術館(「ロダン頌」、ムア、ザツキン、アダムの3作家のみ所蔵)も同様の版画を所蔵していることは確認できている。タイトルの翻訳は所蔵館によって異なるため、その他の所蔵館に関しては調査しきれなかった。
- 4) 高橋幸次「ヘンリー・ムア—人間像の再生、形態・空間、生命」『ヘンリー・ムア 生命のかたち』(展覧会図録) 石橋財団ブリヂストン美術館、2010年、6-14頁。
- 5) 高橋幸次「横たわることと立つこと：ムアとロダン」『ヘンリー・ムア展』(展覧会図録) 川村記念美術館、足利市立美術館、高松市美術館、鹿児島市立美術館、2003年、26-31頁。
- 6) 高橋、前掲註5、26-27頁。
- 7) *Berto Lardera, entre deux mondes, exh. cat., Musée de Grenoble, 2002.*
- 8) Ionel Jianou, C. Goldscheider, *Rodin, Paris, 1967.*
- 9) *Oublier Rodin? : la sculpture à Paris, 1905-1914, exh. cat., Musée d'Orsay, Fundación Mapfre, 2009.* フォートリエ、ジャコメッティ、ピカソによるロダ

- 
- ン復権については、以下の論文を参照。Brigitte Leal, "Rodin et la sculpture de l'entre-deux-guerres en France," in *Rodin: le livre du centenaire*, exh.cat., Réunion des musées nationaux-Grand Palais, 2017, pp. 226-229.
- 10) カトリーヌ・シュヴィヨ「国際的芸術家としてのロダン」『静岡県立美術館ロダン館開館20周年 記念国際シンポジウム オーギュスト・ロダン (1840-1917) —複合的視点でとらえる—記録論集』静岡県立美術館、2016年、15頁。
  - 11) Richael Blackburn, "Forword," in Kirk Varnedoe et al., *Rodin: Magnificent Obsession*, London, 2001, p. 9. 同書が指摘するには、カンターが1946年にロダン作品を購入したときには、流行遅れの彫刻家というイメージだった。
  - 12) 「没後50年記念 ロダン展」国立西洋美術館、1966年7月23日-1966年9月11日；京都市美術館、1966年9月18日-1966年10月30日；福岡県文化会館、1966年11月9日-1966年12月11日。
  - 13) Albert Elsen, "A New Book on Rodin," *The Burlington Magazine*, Vol. 109, No. 776 (November 1967), pp. 649-650.
  - 14) 2002年にスタンフォード大学カンターアートセンターで開催された「ロダンに関する新しい研究」と題されたシンポジウムの際に、ルース・バトラーは、エルセンとゴールドシデルとのあいだの確執について語った。http://rodin-web.org/stanford/Stanford\_cfp.htm
  - 15) Albert E. Elsen, *Rodin's Gates of Hell*, Minneapolis, 1960, p.x.
  - 16) Ionel Jianou, "A new Book on Rodin," *The Burlington Magazine*, Vol. 110, No. 784 (July 1968), p. 410.
  - 17) Ruth Butler, *Rodin: The Shape of Genius*, New Haven and London, 1993, pp. xi-xiii. (ルース・バトラー『ロダン 天才のかたち』馬淵明子監修、大屋美那、中山ゆかり翻訳、白水社、2016年、11-15頁)
  - 18) *Correspondance de Rodin*, 4 vols., Musée Rodin, 1985-1992; Claudie Judrin, *Inventaire des dessins*, 4 vols., Musée Rodin, 1987-1992; Antoinette Le Normand-Romain, *Rodin et le bronze: catalogue des œuvres conservées au Musée Rodin*, 2 vols., Réunion des musées nationaux, 2007.
  - 19) Cécile Goldscheider, *Auguste Rodin: catalogue raisonné de l'œuvre sculpté*, tome 1. 1840-1886, Paris, 1989.
  - 20) *Rodin Drawings: True and False*, Washington, National Gallery, November 20, 1971-January 30, 1972; New York, Solomon R. Guggenheim Museum, March 9-May 14, 1972.
  - 21) *Rodin Rediscovered*, Washington, National Gallery, June 28, 1981-May 2, 1982. 展示については以下の展覧会評が詳しい。John M. Hunisak, "Rodin Rediscovered," *Art Journal*, Vol. 41, No. 4 (Winter, 1981), pp. 370-371, 373, 375.
  - 22) *Kieger-Rodin*, Paris, Musée Rodin, March 14, 2017-October 22, 2017; Philadelphia, Barnes Foundation, November 17, 2017-March 12, 2018. 没後100年の特設サイトは以下の通り。http://rodin100.org
  - 23) *Rodin. L'exposition du centenaire*, Paris, Grand Palais, Galeries nationales, March 22, 2017-July 31, 2017.
-